

・地方から女性がいなくなる

人は、他人に頼らず生きていけるよう技術や社会システムを開発してきた。都市部に集まるのは日本に限ったことではなく、人間の素直な欲求に従っているだけ。ある程度人口がいなければ、出会いもすくなく、周囲の監視の目から逃れることもできないため、地方は居づらいという結論に至る。

家族もみな都市部に住み田舎というのが無かった私が、結婚を機に都会から地方に移住し、子育てしながら起業したがとても心地いい。都会の情報過多から逃れ、澄んだ空気、広い空、美味しい食材、もう都会に住みたいと思わない。結婚前の移住はどうなのか、子育て中の移住はどうか、多様なロールモデルを整理して、女性たちに居心地のいい地方の在り方を研究し、対策する必要がある。

・スタートアップ支援は本物を！そして、細部の仕組みにまで反映を！

いざ海外へ出ようとする、起業や経営経験者があれこれ集まってきてネットワークを供与し、アドバイスを多々いただけることを経験し、日本は起業経験のない支援者ばかりで、本質的なサポートはまだまだできないと感じざるを得ない。

また、研究開発や新規事業を進めるにあたり政府の事業を活用したり、コンソーシアムに参加することがある。都市部のコンサル事業会社が事務局を務めることが多いが、研究開発を実行する主たるプレイヤーよりも、事務の方が報酬単価が何倍にもなっていることがほとんど。これで本当に新規事業を生み出そうと考えているとは思えない。

・受験による競争を抑制すべき

人材育成におけるリベラルアーツの不足がすべての価値創造の力不足に影響している。基礎学力をつける程度の評価は必要だが、受験という特殊スキルに重きが置かれ、何が美しい、美味しい、楽しい、等を感じ分かち合うことを許さない。結果的に、余白を持つことを許されない、もしくは許さない人材を生んでいる。「芸術は食べられるんですか？」食べられないなら不要ですというような。理系女性が少ないのも、どこで役に立つかわからないような受験スキル向上に納得感が得られないからではないかと思う。

2024年6月10日 加藤百合子